

日本・ネパール文化交流倶楽部
フューチャーフラワー基金第5期報告会

平成24年4月22日

毎年恒例の交流ツアーと、子供の面接と継続の支援金を届けるため、交流倶楽部代表が今年2月末から3月にかけネパールに滞在しました。それにつきまして、今春スタートした学費支援「フューチャーフラワー基金」第5期の報告会が、仙台市宮城野区で開かれました。当日は15名の方々と仙台在住のネパール人留学生2名（スボル・KCさん、ナクル・ブンさん）が参加してくれました。

① 開会と代表挨拶と参加者自己紹介

サンジブ代表の挨拶では、元々は無謀から始まったものが、今ではたくさんの人々の応援で成り立っていること、震災の影響もあり今後の支援に不安がよぎることもあったが、逆に絆を深め、支援の継続と新規の支援を広げることができたことなど、日ごろのご理解とご協力への感謝の言葉が述べられました。

② 交流倶楽部のこれまでと、フューチャーフラワー第5期(2012年4月～)の学費支援について

まず、アシスタントの鈴木さんから交流倶楽部のこれまでの活動についてと、ネパールで支援を行っている地域について説明がありました。今まではほとんどの子供たちは代表の故郷ダディン郡（山岳地帯）出身でしたが、今回から新たにタライ地方（インド国境沿いの平野部）のバラ郡から3名の子供たちが選ばれました。

サンジブ代表からは、第6回ツアーに参加した支援者の徳永さんを、今回里親としては初めてダディン郡の村まで連れて行ったことについてお話がありました。村に到着して里子と初対面した徳永さんは、そこで初めてこのプロジェクトの規模の広がりや代表の真剣さ、意義や重要性を実感し、驚きを隠せなかったそうです。

それから支援対象となる子供たちの親は教育を受けていないのでモラルも低く、教育の必要性がわかっていないのが現状。カースト（身分）制度は廃止になってはいますが、もともとの家業さえ（たとえ日雇いでも）何とか続けて食べていければいいというのが大半の親の考え方だそうです。そこで代表たちは村でそういった大人たちにも支援の意味をなるべく理解してもらえるよう説明し、お金を子供の為に使っても少しの残りが家計の助けになるような（自給できない塩や灯油などが買える）システムにしています。またそういった低い身分の村人たちは、私たちの支援の存在も知らない場合が多いので、そういう社会の底辺の子供たちを探し面接するために、他の村人からも情報を集め、自ら歩いて家々を回ることもしています。

子供たちが学校に行けない理由については、親が病気や事故で死亡、障害を受けてしまったり、また生きていくために子供を置いて失踪してしまったりと、ほとんど保護者やその家庭の経済状況にあります。皆一度は入学するものの、土地も少なく親が教育を受けなかったため、安定したかつ安全な、現金収入のある仕事は一切ありません。蓄えも無いため子供たちの教育どころではない状況です。そんな中で学業に集中することもできなければ、進級することも、通学さえ困難な状況に陥ってしまった子供たちです。今回自分の村から選ばれた子供の中に、両親をエイズで亡くした子供がいたことが、初めてのことでとてもショックでした。面接では一瞬何も考えられなくなるほど悲惨な状況を聞いたりしますが、冷静さを失わず必要な情報を集めます。

支援が広がってくると、親戚などのコネで支援を受けようとする村人ももちろん現れます。その子供たちとは面接の際、「日本の支援者が選ぶので決定ではない」と伝え、本当に必要な子供が見つかるまで何人も面接をします。そこで支援者の数に応じて、状況の悪い子供から選んでいきます。期待をさせることも、敵を作ることも避けるためです。

③ ネパールを訪問し里子と対面した里親さんの報告（お話で印象に残った部分を一部抜粋）

今回は3名の会員さんが発表してくださいました。徳永さんと鈴木さんは写真をスライドで写しながら、現地の様子や対面した時の気持ちなどをとても詳しく伝えてくださいました。

◎徳永 富美恵さん ※別途資料あり

手紙のやり取りがなかなかできないことに物足りなさを感じていたところでしたが、村には手紙を書くという習慣が無い為、書き方が分からない。しかも村には郵便局や切手はもちろん、紙や鉛筆、現金さえ手元にあるのか不安になる状況。文通のような手紙のやり取りは大変困難、と実感しました。そしてもっと支援者が会いに行けるように、「交流の家」の必要性を感じました。

◎ 竹田 文子さん (三重県から参加)

第6回ツアー(2010年3月)にて、バスで「ササ」まで里子に会いに行きました。道中はとてもハードな道のりでしたが、対面した里子親子は、言葉は通じませんが確かな感謝の想いを持った瞳で見つめてくれ、日本の子供たちの目とは違うなと感じました。

◎ 鈴木 かおりさん ※別途資料あり

子供はとても恥しがり、初めのうちは会話どころか笑顔も交わすのがとても困難でした。里子に会いに行った理由:「支援されている実感」を里子に与えたい、そして未来に希望を持ってほしい。そして日本にいる私たちも継続した支援が必要だと改めて思いました。

④ 第7回ネパールツアー参加者の感想

◎伊藤さんが初めての海外旅行で今回のネパールツアーに参加し、現地人との交流やヒマラヤなどの大自然を満喫してきたことをご報告いただきました。

⑤ ネパールダンス発表 鈴木 かおりさん

ネパール滞在中に民族舞踊を習ってきた鈴木かおりさんが、煌びやかな衣装を纏いダンスを披露してくれました。

⑥ 今後の予定、連絡事項など

- 次期学費支援の受付締め切りは7月末となっています。
- 交流の家(倶楽部ハウス)プロジェクトでは、建設用地は確保してありますが、設計やシステムなどもまだまだ計画中で、プロジェクトを広め、資金を募る方法等についても随時ご意見を募集しています。

⑦ 交流・質問タイム

- Q. 「フューチャーフラワーのことを広めたくて友人知人に話すとき、“里子・里親”という言葉に反応し“うちで子供は預かれない”と誤解を招いてしまうことがよくある。そういうことではない、と説明をするが、どうも“里子・里親”という言葉が引っ掛かりなかなか理解してもらえないことがある。何か他の言い方に変えたほうが良いのではないか?何かほかに良い呼び方は無いか?」
- A. 外部の人たちにより分かりやすく親しみやすい呼び方があればもっと支援を広めていけるのかもしれませんが。支援を広げ、継続する為の会員様からのご意見も貴重ですのでどんどんお寄せください。
- Q. 今後 NPO 法人にすることは無いのか?
- A. 去年から出ている話ですが、お金や人事のことなどの問題があり、もう少し慎重に検討していきたい。

《まとめ》今回は、様々な体験をした会員さんの発表もあり、ネパールに行ったことのない方々にも現地の様子や、交流倶楽部が目的とする“交流活動”について良く伝わったのではないのでしょうか。

またフューチャーフラワー基金の子供たちはインフラさえ不十分な田舎に住んでいる為、まだまだ日本や支援者に対するイメージが湧きにくいという問題があることが分かりました。実際会いに行き交流することは、お互い良い思い出になるだけでなく想像力や充実感、責任感を感じるきっかけになると、貴重な体験談から感じました。

今後も課題はありますが、意見を出し合って話し合うことでより良い方向へと向かっていけると思います。そして今回改めて、継続的な支援と情報の発信の重要性を強く感じました。支援する側、される側、お互い寄り添う心で“ウィンウィン”の関係を築けていけたら素敵ですね。